

コンピューター及びインターネットを利用する遠隔交流授業

陳卓君*1

Email: iamwinger@hotmail.com

*1: 千葉大学大学院人文社会研究科

◎Key Words 国際交流, Skype, 重慶, 格差

1. はじめに

中国では、農村部と都市部の社会的な格差があるだけでなく、都市間の格差もかなり大きくなってきている。その格差の1つに、国際交流のあり方に関する格差が挙げられる。中国において共に直轄市として知られている重慶と上海は、重慶では国際交流の機会が少ない。例えば、上海市少年宮は、様々な国際交流の団体を作って、毎年1000名以上の子どもたちがはるばる海を渡って、オーストラリアへ短期留学したり、アメリカへ観光や学習体験をしたり、スウェーデンで中学生クロスカントリースキーなどの活動に参加したりしている。上海市少年宮が主催し、1994年から開催した上海国際少年文化芸術祭は、40カ国の子どもが上海で交流するもので、世界でも注目されている。しかし、重慶少年宮を見ると、国内における交流活動は多いが、海外の子どもたちとの国際交流活動はほとんどない。

上海は昔から地理的条件に恵まれていて、外国から人が来たり、上海の人が外国に行ったりと、交流がしやすく、国際交流が順調に進んでいる。では、他の地域（特に重慶などの内陸地区）はどのようにすれば国際交流を行うことができるのだろうか。

現在、中国において12000の中学校と44000の小学校が通信技術に関する授業を設けており、授業を行っている学校は中学校全体の70%と小学校全体の10%を占めている。小中学校のパソコンの設置に関しても、地域によって格差があるものの、内陸の地域でも、国家による補助や国際的支援によって、普及してきている。このように、中国でも通信技術が発展することにより、情報コミュニケーション技術（Information Communication Technology）を利用する遠隔教育も重要視されてきている。

教育において、インターネットなどの通信技術を用いることにより、他国と交流する機会を生み出すことが可能となる。そのため、地理的条件に恵まれていない地域であってもインターネットなどの通信技術を用いれば国際交流が可能となる。つまり上海であっても重慶であっても、インターネットなどの通信技術があれば、より多くの子どもたちが国際交流の活動に参加することができ、都市間の国際交流に関する格差も小さくすることができると考えられる。中国の内陸にいる地域の子どものにとって、ICTを積極的に活用することは、外国の子どもとの間の国際交流を盛んにする可能性がある。

2. 研究の目的

本研究では、インターネットのSkypeという通信技術を使って、日中小学校で国際交流授業を通して、重慶の子どもたちは国際交流についての興味を高めるのか、相手から何かわかったのかを検討し、また、日中間のインターネット接続状況を検証し、重慶の子どもたちと教師たちの国際交流・自己反省の意識を分析し、その実践の有効性や改善点を明らかにすることを目的としたものである。

3. 授業プランの開発

重慶の小学校は初めて国際交流を行うので、2つの国のビデオ鑑賞—興味を持ち—楽しく生活について交流・学習という学習のデザインが生まれた。インターネットを使った交流学習を重慶の学校として行う場合は、十分にこれらの問題を意識した上で取り組みを行うことが大切である。

そのほか、2つの国の教師の役割（撮影・記録・通訳者など）についての相談・決定し、教師用・子ども用のアンケート、インタビュー・コメント用紙・記録用紙を用意する。



図1 授業の様子

4. おわり

授業の結果及び考察（一部）について説明をする。

4.1 重慶で情報通信技術—インターネットサービス電話を利用した効果

インターネットサービス電話Skypeは、交流授業を行うにあたって大きな役割を果たした。今回の授業を通して、日本とタイムリーに双方向の情報交換を行えることがわかった。つまり、即時性がある。さらに、子どもたちへのインタビューから、「中継を取り入れた授業は、すごく親近感を得ることができる」という意

見もあった。そして、通信技術を使った授業でありながら、機器操作の負担を子どもたちにかけることがないので、小学校低学年でも可能であると考え。

4.2 授業構成やビデオの有効性について

授業構成の流れは、全体的な印象から個人的な印象へ進んでいた。第1時でビデオを導入で取り上げたことで、子どもたちの興味関心を高め、もっと知りたい気持ちを生んだ。

第2次の準備の活動で、班単位のグループの話し合いを取り入れ、自分たちの学校生活を相手に紹介するという形式を通して、子どもは自分自身の生活を考え始めた。

第3次と第4次は Skype を利用して、学校生活を紹介、ショーをやって、前よりもっと理解し、仲良くなった。このように、子どもたちの考えや思いに応えながら、授業プログラムを広げて展開することにより、こうした交流が進んだと考える。

4.3 インターネットの接続問題

インターネットの接続は進行できたが、画面ははっきり見えない、インターネットの接続のスピードは遅い、反応も遅く、子どもはお互いに待っている時間が長いなども課題もいくつか出てきた。できれば中国でこの通信技術に関する設備がより多くの学校や施設に広がっていってくれることを期待する。また、言語の壁など交流の際の障壁を解消する手立てとして、相手が画面を見て理解しやすい、大きめの投影機などを用意しておくことが必要であると考えられる。このように、うまく情報通信技術を授業で利用するため、それに関する通信技術及び関連ソフトウェアの知識を勉強し、インターネットをうまく通じる情報を収集し、接続しやすいインターネットの環境を作りたい。

4.4 その他

筆者は、21世紀における日中関係を考えると、改めて両国の交流、相互理解の大切さ、子どもたちの交流が大切になっていることを強く感じている。よって、今後の研究で、日本について興味を持つことだけで終わらせずに、お互いに理解、勉強し、国々の価値観・人生観を分析・思考、深めて理解でき、積極的共存することができるようにするため、それを行動に移すようにするための新たな授業プログラムを生み出して行く必要があると考える。

参考文献

- (1) 佐々木真理 熊安那 『中国・日本間の遠隔共同授業における生徒の国際理解意識の形成』 年会論文集 2003年
- (2) 大塚薫 『SNS を利用した日本語作文授業の試みー対面教育及び遠隔教育を統合した授業』 高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要 第2号 2008年
- (3) 佐々木真理 『遠隔共同授業における安心のデザイン』 デザイン学研究 特集号 [巻号一覽]. デザイン学研究 特集号 2008年
- (4) 「タイとの遠隔授業」 『NEW 教育とコンピューター』 学研マーケティング 2000年